

シンガポール日本人学校と英語教育

子どもの特質を活かしたコミュニケーション能力の育成が行われている。



愛知教育大学大学院
教授 高橋美由紀

文部科学省は、「アジアの中でトップクラスの英語力を目指す」として、英語教育改革を進めている。本稿では、筆者が訪問したシンガポール日本人学校の英語教育について紹介、今後の日本の英語教育に示唆できる点を述べる。

21 世紀に生きる日本人として

シンガポール日本人学校は、小学部2校(クレメンティ校とチャンギ校)、および中学部1校(ウエストコースト校)から成り、3校で生徒・児童数は2千人を超える。21世紀に生きる日本人として「豊かな国際感覚をもち、世界の人々とつながろうとする人材の育成」を教育理念に掲げESD(持続可能な社会の担い手を育む教育)に取り組むとともに、「生きる力を育むための基礎基本の徹底」「英語教育の重視」「国際理解教育と現地校交流

の推進」「ICT教育の充実」「家庭・地域(シンガポール)との連携」の5点を重視した教育活動を行っている。

同校の高橋勇進事務局長によると、現地校との交流なども盛んであり、英語コミュニケーション能力の向上は必須だという。

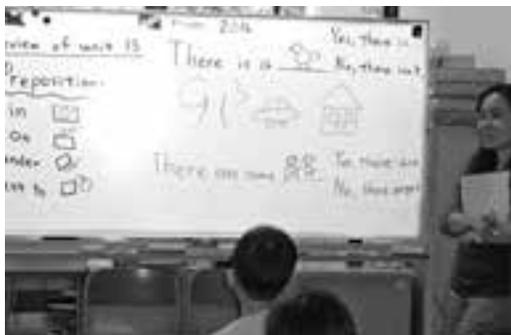
英語で他の科目を学習する

小学部では、1年生から6年生まで外国人教師が教える「英会話」の授業が週3回以上行われている。各学年の児童を12段階の習熟度別に少人数に分けて指導する。

一例を挙げると、2年生の「場所と There is ~. There are ~. の表現」で、海外に来て日の浅い児童が多い入門クラスの授業では、「部屋にあるもの」を英語で学習する。初級クラスでは、「部屋の様子」を描いた絵を見ながら(写真1)。中級クラスでは教師がホワ



(写真1)初級クラスは部屋の様子を描いた絵を見ながら



(写真2)中級クラスでは教師が絵を描いてコミュニケーション場面を設定



イトボードに絵を描きながら、“There is ~ on the box.”等、コミュニケーションの場面を設定(写真2)。上級クラスでは過去形や未来形の練習も行う(写真3・4)。また、他教科を英語で教える「イマージョン教育」は、音楽と水泳の授業で英語話者の教師と日本人教師のTT (Team Teaching) によって実施されている。これらの教科は体験的であるため、入門期の児童であっても英語で教師が話すことについて抵抗感はないようだ。

中学部では文部科学省の学習指導要領に沿ったカリキュラムで、英語の授業は週4時間。生徒は週3時間、4段階の習熟度別の少人数で学習し、週1時間は「体験的で実際の言語活動を All English で行う授業 (Ex)」を受ける。イマージョン教育は音楽・美術・家庭科・体育でTTにより行われている。

なお、中等部では、これまでの通常のクラスに加えて、2017年4月から中学1・2年生を対象に「高校や大学での留学を視野に入れた、語学力と発信力に自信をもつ生徒」を育成するための「グローバルクラス」を設置、(写真3)



(写真4) 上級クラスは Oxford のテキストで

クラス担任は英語話者と日本語話者の2人で担当し、毎日の学級活動は英語で行う。

多文化共生社会の人材育成

グローバル時代の教育には、日本人としてのアイデンティティを大切にしながらも外国の言語と文化を理解してお互いを尊重することができる人間を育成することが大切である。以下は、シンガポール日本人学校の英語教育から日本に積極的に取り入れたい点である。

(1) 小学校低・中学年は音声に対して敏感な時期。英語母語話者による質の高いインプットを継続的に与えることや、実際のコミュニケーションの場面を設定して意味のあるやりとりを体験的に学ぶことは、子どもの特質を活かしたコミュニケーション能力の育成に効果的である。

(2) 高学年から中学校では児童・生徒のメタ認知(より高度な認知力)が発達する。学習者自身が英語学習の有用性や達成感をもつことができる授業は重要。また、現地校と交流を図る活動等、英語を実際の場面で使うことで、学習に対するモチベーションも高められる。

(3) 英語コミュニケーション能力に加えて、異質なものへの寛容さや対人関係への態度等のコミュニケーションに関わる総合的な能力である異文化間能力についても指導が行われている。多文化共生社会に適応した人材育成としても有意義である。 ■

(たかはし・みゆき)

京都大学博士(地域研究)。「小学校英語活動地域サポート事業」「初等教育段階における英語教育のための教師研修会」などを数多く実施し、理論に基づいた実践的な指導法を紹介している。